

アフリカの人々と名付け 45

フライデーとは誰か——誕生曜日の意味

小馬 徹

ガーナのアカンの人々は、折りにつけ、誕生曜日名ごとのグループに分かれて募金を競い合うという。そうであるのは、誕生曜日名が、「子供の精神を表す名とか運命の名」だからに違いあるまい—前号参照。

日本には誕生曜日の観念はない。だが、アカン人の曜日名と全く無縁なわけでもない。アカンでは、水曜日に生まれた男児にはクワク、女児にはアクアという誕生曜日名が与えられる。アクアという名と水曜日の結合は、水族館 (aquarium) や西洋の星座の水瓶座 (Aquarius) を正しく連想させる。さらに、仏に捧げる水や花を置く棚を意味する閼伽 (アカ) 棚や、船のアカ取りという場合のアカが水を意味することを思い出させよう。だが、それは歴史の遠い記憶の断片である。

ロビンソン・クルーソーとフライデー

人類学者リンハートは、アフリカからヨーロッパへと思索の翼を羽ばたかせ、次のような示唆に富む、感慨深い言葉を綴っている。

「通常は高位の家のものだけに与えられる名前もあるが、彼らが身分の低い多くの人々と共有する状況のなかに自らを置く類の名前をもつこともあるだろう。フォンティとアシャンティの人々は誰もが曜日の名前を与えられるのだから、ロビンソン・クルーソーの登場人物であるフライデーはガーナの王であったかも知れない。ところが、英語ではフライデーの名は低い地位を暗示しているのだ」 [Lienhardt, G., "Social and Cultural Implications of Some African Personal Names", *JASO* 59(2), 1994].

なお、フォンティもアシャンティもガーナのアカン人の一分肢であり、王国を形成した。

金曜日と名前

キリスト教徒にとって、金曜日は節制して情交を避け、肉の代わりに魚を食べるべき忌日だ。マザーグースのいくつかを引こう。「月曜日のクシャミ、危険なクシャミ／火曜日のクシャミ、知らない人とキッス／水曜日のクシャミ、手紙を貰う／木曜日のクシャミ、いい事あるよ／金曜日のクシャミ、悲しみのクシャミ／土曜日のクシャミ、愛しい人に明日は会える」。「月曜日は独り／火曜日は一緒／いい天気なら水曜日は散歩／木曜日はキッス／金曜日は泣いて／土曜日は飛び出さんばかり……」。「日曜日に船出、失敗はない／金曜日に船出、不運と疾風」。

ロビンソン・クルーソーは、孤島に流れ着いた後の24年目に初めて、人間の仲間を得た。しかし、その当の黒人の友をさえもフライデーと名付けている。ここには、デフォーの時代のイギリスの人間観の限界がはっきりと窺える。

幸か、不幸か

ポーランドのM. ムジェロヴィチは、『金曜日生まれの子』という児童小説を書いた。東欧ポーランドもキリスト教圏であり、やはりここでも金曜日生まれは不運な子なのである。

ところが、イスラム圏アフリカでは、金曜日生まれは決して不幸な子供ではない。オスマン・サンコンは誇らし気にこう書いている。

「ギニアでは金曜日に生まれた子供は幸せになるとされている。イスラムの安息日にあたるからだ。一九四九年三月十一日生まれのぼくもそうだった」 [『大地のおしえ』, 1996]。彼は、ギニアのスーサー人として生まれついている。

さて西欧社会は、理想的な存在、つまり「神の似姿」として自画像を描く事で自らのアイデ

ンティティを構築しようと腐心してきた。デフォーの『ロビンソン・クルーソー』はまさにブルジョア的な人間像の典型であり、孤島でその理想を白紙から実現していく物語である。

それはよいとして、E. サイドが鋭く指摘した通り、自らの陰画として他者の否定的な表象を同時に生み出しては強化する西欧の独善的ポリティックスは、徹底的に暴かれ、批判されねばならない。今や金曜日もその表徴の一つとして使われていた事実を我々は知っている。

オリエンタリズム

小川了は、西アフリカのフルベでは月曜日や水曜日に因む誕生日名はあるが、火曜日や木曜日はそうではないと述べた [『サヘルに暮らす』、1987]。つまりフルベも、西洋と同様、曜日を縁起を良い日と悪い日とに分けるのだ。

隣人同士であるアカンとバウレでは、誕生日名が一日ずれている。では、この僅かなずれに起因する行き違いや偏見が両民族の間に生まれ、固定されただろうか。筆者は、この間の詳しい事情を知らない。だが、キリスト教とイスラム教の安息日のずれがオリエンタリズムの表象として援用された類の事態は聞き及ばない。やはり、「オリエンタリズム」のポリティックスは、字義通り西欧流のものであるらしい。

市の日に因む誕生日名

誕生日名に似るのは、特定の「市の日」に生まれた事に因む命名であり、ナイジェリア南部などに広く見られる。西アフリカでは古くから交易が盛んだったから、これは恐らく、イスラム教とは独立に発展した命名慣行だろう。

一方東アフリカでは、スワヒリ文化圏を除いて、誕生日日に因む命名も、市の日に因む命名も見られない。例えば、西南ケニアのキプシギス人は、スワヒリ語 *kazi* からの借用語である *kazit* で、白人入植者が持ち込んだ曜日と賃労働とを共に呼ぶ。一方、植民地化以前に牛牧の民として名を知られた彼らは、牛の飼育などが

来の仕事は *boisiet* と呼ぶ。後者は *boiboi* (喜び) や *boiyot* (年寄り) と語根を共にしており、いかにも好ましい語感がある。牛牧民の伝統を生きていた時代、自分の牛群を陶然と眺めて幸福に浸って、牛の増殖を望む意欲を高揚させる事こそが仕事の要だった。植民者はこれに共感を寄せず、怠惰の証と決めつけて弾劾したのだ。オリエンタリズムは、常に自らの陰画を生む。

縁日に因む誕生日名

因みに、日本の事情はどうか。日本人には実に多彩な名付け慣行の歴史があるが、誕生日名は生まれなかった。西欧的な誕生日の観念がなく、明治以前には曜日の観念もなかった。ただ、それぞれの時代の各々の地方ごとに複数の定期市が開設される重なりがあり、週に似た時間のサイクルを構成していたと言えよう。

日本で誕生日名にやや似るのは、誕生した日の干支や、誕生日と重なる神仏の縁日を記念する名前である。中世には、牛子、虎子、駒子、猿子、犬子、毘沙子、観音子らの女性名は、珍しくなかった。龍子などは命を永らえて、つい近年まで見られた。ふうてんの寅さんは言わずもがな、牛太郎、虎次郎などの男性名も同様である。例えば、東洋史学者として知られた内藤湖南の名前は虎次郎である。但し、全ての虎次郎が虎の日の生まれとは限らない。化学者であり、随筆に優れた寺田寅彦は、俳号を寅日子と言ったが、名前の由来は寅年の生まれにある。

さて、夏日漱石は、庚申の日の晩に生まれた。当時この生まれは大泥棒になると信じられたので、厄除けに金の字を取って金之助と命名されたのだ。残念ながら、金曜生まれのフライデーではなかった。スティグマはあっても、オリエンタリズムとは無縁である。

歴史と文化に学びつつ想像の翼を逞しく羽ばたかせる時、寅さんや漱石の名もアフリカの誕生日名と無縁ではないと言えるだろう。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)